

廣瀬俊朗



盤石なチームの根幹には「大義」がある

T O S H I A K I H I R O S E

元ラグビー日本代表キャプテン

自主性を大事にしてくれた 高校時代の恩師

僕がラグビーを始めたのは5歳のとき。自分の希望ではなく、両親の勧めで入ったラグビースクールだったので、最初は嫌々でしたね。でも、友達ができて、少しずつ活躍できるようになると、次第に面白くなってきて、中学校では自らラグビー部に入部。高校も、花園に出場経験のある府立の進学校に狙いを定め、猛勉強しました。念願かなって合格したのですが、学力のレベルは高いものの、ラグビー部のレベルは想像よりは高くなく、全国大会出場は難しいかなと思いました。でも、そのおかげで「いいチーム、強いチームをつくるにはどうすればいいのか」を真剣に考え、工夫できる自分になれたのだと思います。また、顧問の先生が、生徒の自主性をとても大事にくださっていたので充実感がありました。ある練習試合で先生が示した戦略とは異なる戦略を、僕が提案したときのこと。先生は「よく言ってくれたな」と僕を褒め、僕の戦略を採用してくれたんです。それがとてもうれしかったことを今でもよく覚えています。

心の底から出る言葉は 人の心をも動かす

中高を通して、部活とは別に選抜チームでもプレーをしていましたが、大学のチームはレベルが高く、プレーのしがいがありました。ただ、4年生でキャプテンになり、約120名のチームをまとめるのには苦労しました。

大学卒業後は東芝のラグビーチームに入団し、2年目でレギュラー、4年目でキャプテンに。ところが、その翌年、チームが絶好調のさなか、選手の不幸事が2度も起きてしまい、チーム存続の危機に見舞われたんです。世間からは厳しい声が寄せられ、正直、すべてが終わったと思いました。だから、チームの存続が認められ、練習再開の許可が下りた日に、キャプテンとして皆に話したときのこと。は忘れられません。「このピンチを乗り越えるには、最高の試合をして勝つしかない!」と、自分の内側から溢れてくる思いの丈を、涙も構わずに夢中で伝えました。そのとき、チームメイトの1人が「お前にコントロールできないことは考えても仕方がない。お前にできることを一生懸命にやればいい」と言ってくれました。その彼には今でも感謝しています。そうしてチーム一丸で練習を重ね、臨ん



慶応大学時代（左から2番目）。「信頼できる先輩と仲間に恵まれました」と廣瀬さん。

だ決勝戦で、優勝することができました。このとき、人を動かすためには、自分をさらけ出すことも必要なのだと学んだように思います。

「勝つチーム」をつくるために 僕が実践したこと

2012年、日本代表のキャプテンになってから、強いチームをつくるために僕が実践したことを少しお話します。というのも、ラグビーに限ったことではなく、学級づくりを含め、組織づくり全般に共通することがあると思うためです。

まず、「勝つチーム」には必ず「大義」があります。「なぜ勝ちたいのか」という「大義」を皆で定めた上で、決して諦めない「覚悟」を持ち、「ビジョン（目標と道のり）」を掲げ、「ハードワーク」に勤しむ。僕たちの大義は「ラグビーという素晴らしいスポーツを多くの人に知ってもらいたい」というものでした。そして、強いチームに共通していることは、皆が自分のチームを好きであること。それを実現するために、まずは僕が仲間の長所に目を向け、仲間を好きになるようにしました。また、一人一人に適した役割を与え、その後はできるだけ見守るようにしました。チーム全員が「自分はこのチームに貢献できている」と心の底から思うことができたとき、そのチームは無限の力を出すと言っても過言ではありません。実際、2013年に東京で行われた国際試合では、ラグビー大国のウェールズに23対8で歴史的な勝利を収めることができました。

どんなポジションにも 意義がある

2014年、スタメンとして常時出場の可能性が薄れた僕は、キャプテンを外れることに。日本代表チームのために全力を注いだ僕には、とてもショックなことでした。でも、どんなポジションであろうと、その役割を担った

者にしか気づけないこと、できないことがあると思い直したんです。2015年のラグビー W杯では、相手チームを徹底的に分析し、その結果をプレゼンしたり、メンバーに「日本ラグビーの代表なんだ」と奮起してもらおうと、日本のラグビー選手・関係者からのコメント映像を企画し、試合前日のミーティングで皆に見てもらったり。そうして迎えた、初戦の南アフリカ戦。日本は最後の最後で逆転のトライを決め、34対32で勝利できたのです。僕は2016年に現役を引退しましたが、試合に出られない悔しさを超えるほどの素晴らしい仲間に出会えたことを心から幸せに思っています。



東芝ブレイブルーパス時代の廣瀬俊朗さん。「ラグビーの魅力は、絶対的な絆で結ばれる仲間がたくさんできること。それと、多様な役割があるので、どんな体格でも性格でも活躍できるスポーツであることですね」（廣瀬さん談）。

ところで、僕のことを、昨年放送されたテレビドラマ『ノーサイド・ゲーム』（TBS）で知った方も多いのではないのでしょうか。自分がドラマに出るなんて夢にも思っていなかったが、「ラグビーを知ってもらおう絶好のチャンス!」と思い、引き受けました。その結果、「ラグビーに興味を持った」という声が多数寄せられ、昨年、日本で開催されたラグビーW杯にも勢いがついたと思います。YouTube『廣瀬俊朗チャンネル』ではラグビーのことはもちろん、ドラマの撮影秘話もお話ししているので、興味のある方はぜひ!

廣瀬俊朗（ひろせ・としあき）

1981年生まれ、大阪府出身。5歳でラグビーを始め、大阪府立北野高等学校、慶應義塾大学を経て、2004年に東芝ブレイブルーパスに入団。2007年、日本代表入り。2012年、キャプテンとして再選出される。2015年のラグビー W杯では日本代表史上初の同一大会3勝に貢献。2016年、現役を引退し、ビジネス・ブレイクスルー大学大学院に入学。2019年、MBAを取得。同年、東芝を退社し、株式会社HIRAKUを設立。ドラマ『ノーサイド・ゲーム』に浜畑謙役に出演。現在は、所属してきた各チームならびに高校日本代表および日本代表でのキャプテン経験を生かし、教育やスポーツの普及などに力を注いでいる。



わたしのイチオシ!

🎀 クイズ (P36) 正解者の中から
抽選で1名様に、廣瀬俊朗さんオススメの
ルピシア「ブック オブ ティー・ジャパン 日本三十景」
ティーバッグ30種セット（数量限定商品）を
プレゼントします。ふるってご応募ください!

わたしの心にある風景



【海と富士山】

自宅から歩いて行けることもあり、ちょっと行き詰まったりすると、1人で海岸へ行き、海越しの富士山や江の島をぼんやりと眺めるんです。波が刻むリズムや音の効果なのか、次第に心や頭の中が整理されて、新しいビジョンが見えてきたりします。また、どっしりと構えた富士山を眺めているうちに、物事を前向きに捉える力が湧いてきたりもします。家でも考え事はするのですが、森ではなく木ばかりを見てしまいがち。それが、海を前にすると、不思議と物事や自分自身を俯瞰で見つめることができるんです。僕の心にある風景であると同時に、必要な場所ですね。